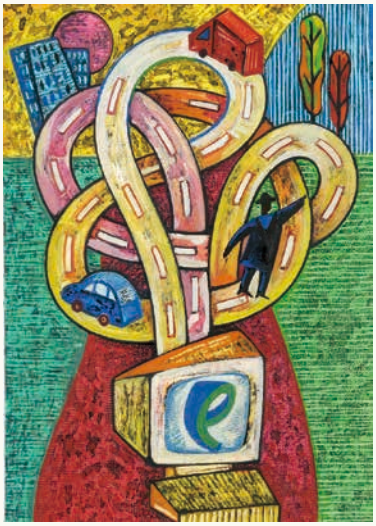
特集 観光情報学 7

遍（あまね）プロジェクト：歴史観光情報コンテンツの生成・配信
―歴史資料の先端的活用を目指して―



堀井 洋[1]　沢田 史子[2]　林 正治[3]
1 合同会社 AMANE　2 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科
3 一橋大学情報化統括本部情報基盤センター

遍（あまね）プロジェクトは，歴史資料の先端的な活用を目指した学術プロジェクトとして 2006 年に設立された[1]．現在，歴史学（日本史）・情報システム学・観光情報学や美術学など，人文科学系と理工学系双方の研究分野から複数の研究者や技術者・学芸員が参加しており，分野横断的な学術コミュニティを形成している．

これまで古文書や掛図などの歴史資料は，大学や博物館など学術機関で取り扱われる研究対象であり，収集・保存・展示されることが一般的な学術資料として認知されてきた．「難解な」「取っ付きにくい」と世間一般に捉えられていたそれら歴史資料を活用して，遍プロジェクトでは歴史観光情報コンテンツの作成および実証実験を実施している．本稿では，石川・金沢地域の歴史資料「梅田日記」をもとにした「梅田日記ぶろぐ」およびスマートフォン歴史観光ガイドアプリを事例として，情報技術による歴史資料の新たな活用について紹介する．

■ 学術的な根拠と地域歴史観光

近年，日本各地域では地域固有の歴史遺産や文化に注目し，学術的な視点を取り入れた新しいコンセプトの歴史観光が創出されている[2]．以前から日本における地域観光は，その地域固有の歴史との密な関係の上に成立しており，城跡や寺院などの史跡巡りや祭り・演舞の観覧ツアーなど，全国の各地域で歴史観光が生み出され，毎年多くの観光客が歴史的な観光名所に訪れている．しかし，その反面，従来の歴史観光では，根拠とする史実・伝説・創作などが混在し，それらの学術的な妥当性の検証が十分に行われているとは言いがたい状況にある．さらに，取り上げる史実の対象や範囲についても，特定の有名な人物やエピソードに偏っていることは否定できない．もっとも，一方では歴史観光に対して学術的な妥当性を求めること自体が，娯楽性を損なわせる“野暮な行為”であるという風潮がこれまであったことも事実である．

このような歴史観光の現状に対して，遍プロジェクトでは歴史観光情報コンテンツの創出に際して，企画当初から次の 3 点を強く意識して活動を実施している．

1. 具体的な歴史資料や研究成果をツアーやディジタルコンテンツなどの根拠とする．
2. 現代との共通性を明らかにして，利用者に共感を与えることを重視する．
3. 学術的な検証可能性を確保し，地域の歴史を学習する機会の創出をする．

以下，「梅田日記」を具体的な例として，歴史資料の概要と活用について述べる．

■ 歴史資料の活用と課題

▮ 歴史資料「梅田日記」の概要

「梅田日記」は，江戸時代末期の元治元年（1864

年）6月15日から慶応3年（1867年）正月までの間，金沢町人能登屋甚三郎（梅田甚三久）が記した日記である．その内容は，役務や政治情勢のほか，交際・衣食住・冠婚葬祭・年中行事・行楽などの私生活に関するものであり，全4冊（1巻目欠）から構成される．昭和45年（1970年）若林喜三郎金沢大学教授（当時）により『梅田日記－幕末金沢町民生活風物誌』として翻刻・刊行され，その後，遍プロジェクト編『梅田日記 －ある庶民がみた幕末金沢』として刊行されている[3),4)]．若林氏の解説によれば日記の筆者である甚三郎は，能登口郡番代手伝を務め，今日でいうならば農政関係の下級公務員という職業の“極めて平凡な一庶民”であった．以下に，「梅田日記」中の庶民生活に関する記述の一部（口語訳文：慶応元年5月11日）を示す．

慶応元年（1865年）5月11日
雨やみ曇り，風がとても冷たい
この行列を森本（下）町（金沢市東山・森山のあたり）の清水屋喜助宅で見物．そこから，針屋次右衛門・有松屋弥一郎・新川粂吉と4人で，味噌蔵町（金沢市大手町・兼六元町・橋場町・材木町・尾張町のあたり）から百間堀を通り，本多家下屋敷のあたりを経て，犀川上流の九里覚右衛門様のお屋敷前（新竪町・菊川・幸町あたり）に出た．そこで，粂吉が，今日江戸から帰ってきた縁者・広岡某の家を訪ねるというので別れ，残り3人で，犀川上の一文橋（桜橋）を渡ってごりやを見歩いた．さて，上のごりやに，鰍（ごり）鰻（うぐい）を養殖しているという大池があったので，そこで屋形船に乗りしばし楽しむ．そこから野田寺町・十一屋（金沢市十一屋町・寺町のあたり）へ行き，草花屋で草花を見物．その後，寺町の鍔屋（鍔甚）へ行き，宴会となった．メニューは次の通り．
煎茶，煙草盆，1鉢［鱚（キス），木瓜（ぼけ）の細切，海素麺（海藻）］，1鉢［くじ鯛の煮立］，吸物［鯛］，飯，汁［すまし，くずし］，煮物［麩，妻白（春菊），松露，鯛］ ※値段は銀20目．さてまた南町の松本屋へ寄って一服．蒸菓子を食べ，麦湯あるいは白湯，または好みによりお茶なども飲み，代銀を払って出る．戻りかけ，犀川で狂談がたくさんあったけれども略す．帰宅は，午前0:00頃となった．（一部抜粋）

「梅田日記」には，このような食事や交遊・行事・事件など幕末の石川・金沢地域の市中の様子や庶民の日常生活に関する記述が多数含まれており，歴史学・民俗学など学術的に貴重な資料であることはもちろん，過去の人物や社会に対する興味や共感・愛着を読む者に与えることから，歴史観光情報コンテンツの素材としても非常に興味深い歴史資料である．

歴史観光情報コンテンツ化へのハードル

しかしながら，この「梅田日記」など実際の歴史資料を歴史観光情報コンテンツとして活用するためには，いくつかのハードルを越える必要がある．**図-1**に歴史研究者による資料解析プロセスを示す．まず第1のハードルとして，多くの日本の歴史資料と同様に「梅田日記」の原本は，**図-2**に示すように“くずし字”で筆記されており，歴史研究者などの専門知識・技能を有した者以外による解読・理解が非常に難しいという問題がある．“くずし字”は近世以前の歴史資料の記述に一般的に用いられている筆記方法であるが，筆跡の癖や，日記や覚え書きのような第三者が読むことを想定していない不定形な文章など，資料ごとにさまざまな特徴・性質が存在する．さらに，長年の保管状況によっては資料自体の破損・摩滅が著しいものや，「梅田日記」のように使用済みの紙（裏紙）を利用して記述された資料など，記述文字の判読が物理的に困難または不可能な場合も多々ある．

第2のハードルとして，歴史資料の生まれた時代の風俗・思想・政治などの時代背景を理解する必要があるという点である．たとえば，前述した「梅田日記」の文頭に“行列”という単語が出現しているが，これは加賀藩13代藩主前田斉泰が江戸から帰藩した参勤交代行列であり，金沢住民にとっては，かなり大きな出来事であったことがこの記述から推測される．歴史観光情報コンテンツ上にこれらの情報を掲載するためには，加賀藩を中心とした，江戸

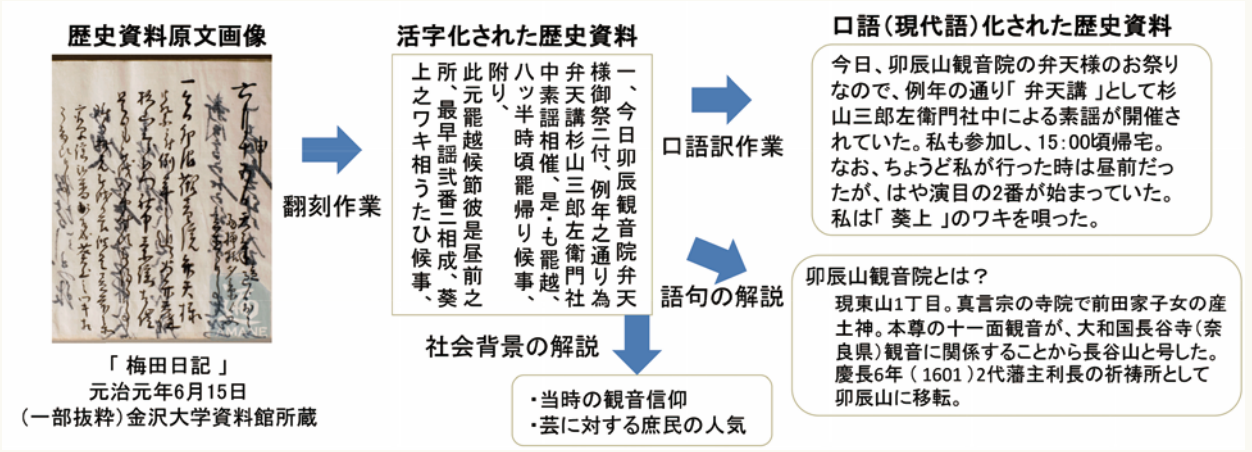


図 -1　歴史研究者による歴史資料の解析プロセス

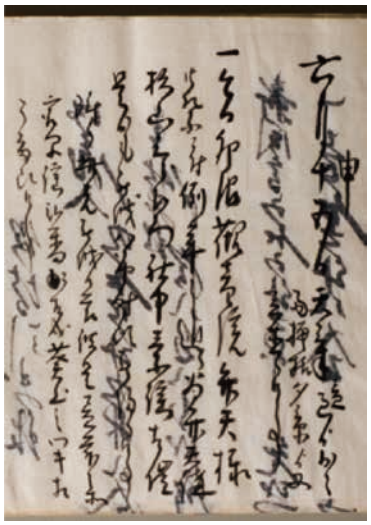


図 -2 「梅田日記」原文画像，元治元年 6 月 15 日の一部（金沢大学資料館所蔵）

期の石川・金沢地域の政治体制や，“参勤交代”という政策，さらには，“士農工商”という厳格な身分制度など，当時の政治・社会に関する基礎的な背景・知識をコンテンツ制作者と利用者が共有しているという前提が必要である．時代背景などの“基礎知識”を意識的・明示的にコンテンツ中において伝達する努力は，これまでの観光コンテンツでは十分に行われてこなかった．これは幸いにも本国では教育の普及によって，“士農工商”などの基礎的な歴史知識が市民の間で共有されているためであるが，近年急速に増加している外国人観光客に対しては，これらの知識の共有は当然のことながら期待できない（たとえば，藩主前田斉泰と能登屋甚三郎の間には，きわめて大きな身分的・階級的な隔たりが存在する，という暗黙の知識・概念の共有は，多くの場合において期待できない）．国籍や嗜好などが多様化した現代の観光客が持っている知識背景をどのように想定し，ディジタルコンテンツ上の表現に反映させることができるかがディジタルコンテンツ分野にとどまらず，日本の歴史観光にとっての非常に重要な課題である．

歴史研究者との連携

以上のように，歴史資料を歴史観光情報コンテンツの素材として活用するためには，歴史研究者・情報処理技術者（ディジタルコンテンツ制作者）・観光企画立案者の 3 者の密な連携や基礎的な知識の共有が不可欠である．

一方，大学や博物館などの学術研究機関の現状を鑑みた場合に，歴史観光の関連した業務に従事，あるいは観光やディジタルコンテンツに興味があり連携可能な環境にいる歴史研究者はごくわずかである．そのため，遍プロジェクトの活動では単なる知識提供を目的とした研究者間の連携のみではなく，大学等に所属しない在野の研究者も参加する研究会の開催や，複数の学術分野で連携した外部資金の獲得など，それぞれ研究者が自らの専門分野での研究活動として，歴史観光情報コンテンツの制作にかかわれる環境作りを目指している．

図 -3 「梅田日記ぶろぐ」画面外観

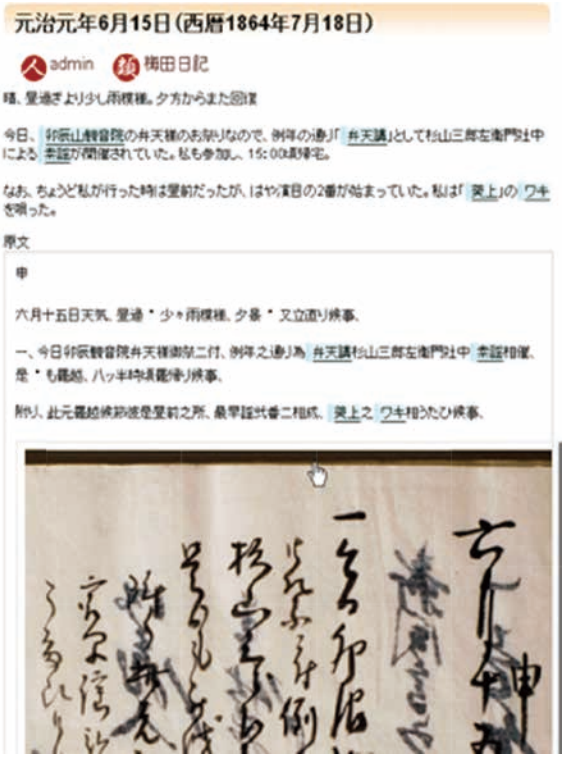


図 -4 口語訳文（上段）・翻刻文（中段）・原文画像（下段）の同時掲載

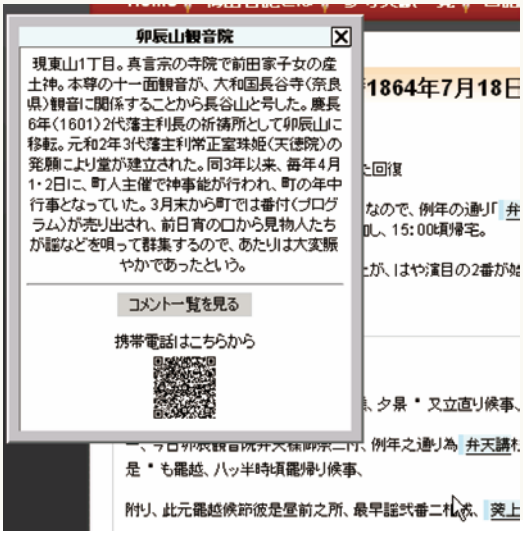


図 -5 記事中へのアノテーション表示

■ ディジタルコンテンツの制作

以上の点に留意し，遍プロジェクトでは，まず「梅田日記」をもとにした歴史観光情報コンテンツ「梅田日記ぶろぐ」を構築した．図 -3 にブログ画面の外観を示す．ディジタルコンテンツ化の手段として，ブログ形式を選択した理由は，①インターネット上のコンテンツ配信システムとして広く認知・普及していること，②「梅田日記」自体が 1 日単位で記述された日記であること，③コンテンツの編集や読者からのコメント受付を容易に実現できること，などの理由である．「梅田日記ぶろぐ」では，歴史資料が持つ学術的な興味深さとブログ記事としての楽しさ・面白さを表現するため，図 -4 に示すように原文画像と翻刻文・口語訳文を同時に掲載する．それらは表現方法においては異なるが内容的な意味は同一である．また記事中には，当時の地名や風習など歴史学的知識が不可欠な語句・単語が出現するが，その際ブログ画面上の文章に対して，アノテーション（注釈）をポップアップウィンドウとして付与し，閲覧者への理解支援を行った．図 -5 にブログ記事中へのアノテーション表示の例を示す． これらディジタルコンテンツ技術を利用して歴史資料をブログ化することは，歴史観光が持つ課題の 1 つである「歴史情報の難解さ」の解消に貢献することが期待される．たとえば，「卯辰山」という地域の歴史情報に関する解説については，一般的には「石川県金沢市にある標高 141m の山であり，安政 5 年の " 安政の泣き一揆 " など政治的な面においても象徴的な存在であった」となるが，この解説のみで「卯辰山」を歴史知識に乏しい観光客が理解することは難しい．しかし，「安政 5 年とは，西暦に直すといつになるか？」・「" 安政の泣き一揆 " とは，どのような事件でその背

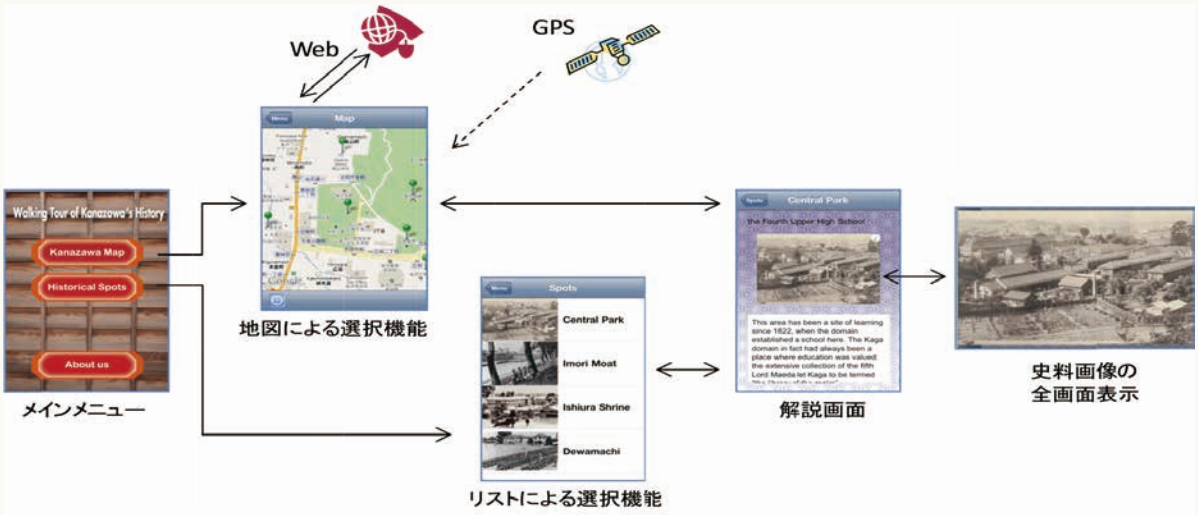


図 -6　歴史観光ガイドシステムの概要

景には何があったのか？」を同時に解説することで，「卯辰山」の歴史的な背景を含めて理解するための敷居は低くなり，より多くの人々が関心を抱くことが期待できる．このような観光客の知識背景を想定・配慮して，解説内容のレベルを設定する手法は，実際の観光ガイドを伴った地域歴史観光では日常的に行われている．歴史観光情報コンテンツにおいても，個々の利用者の知識背景を考慮することで，ユーザフレンドリーな情報提供環境を実現することが重要である．

■ スマートフォンを活用した歴史観光の事例

▮ 外国人観光客への観光ツールとして

近年，多くの自治体では，外国人観光客誘致による地域活性化に取り組んでいる．特に，観光情報サイトの多言語化推進とスマートフォンの普及により，外国人観光客が訪問した地域で使用する携帯型歴史観光ガイドシステムに注目が集まっており，GPS からの位置情報を使った観光施設情報の検索や，AR（Augmented Reality）技術を活用した観光情報提供システムなどが開発されている．

遍プロジェクトでは，スマートフォンによる歴史資料を活用した英語の歴史観光ガイドシステムを開発し，実際に外国人被験者を対象に実証実験を実施した．その一部を紹介する．

▮ 歴史資料を活用した歴史観光ガイドシステム

開発した歴史観光ガイドシステムの概要を図 -6 に示す．本システムは金沢を訪れる外国人観光客向けに，ガイドブックや Web サイトには掲載されていない古写真や古地図などの歴史資料を用いて，歴史的価値があるスポットを英語で紹介するものである．iPhone アプリとして構成されており，金沢市中心部の 14 カ所の歴史解説スポットが登録されている．歴史解説スポットは，地図からとリストからの 2 つの方法により表示でき，地図による選択機能では，Google マップ上に歴史解説スポットと GPS を用いた現在位置を表示して場所のナビゲーションを行う．リストによる選択機能では，14 カ所のスポットの歴史資料のサムネイルとタイトルから選択が可能である．解説画面では，そのスポットの 200words 程度の歴史的解説と関連する歴史資料画像が表示される．解説画面上の史料画像をタップすると，全画面表示され，資料画像右上の情報アイコン（i マーク）をタップすると，資料タイトル，所蔵者，資料の簡単な説明文が表示される．

使用した観光素材は，「古写真」11 点，「古地図」2 点，「歴史上の人物の肖像画・写真」3 点，「当時

図 -7　歴史観光ガイドツアーの様子

の建物や街並みなどが描かれた古絵図」1 点の合計 17 画像と「英訳した歴史文献」1 点を用いた．歴史資料以外にも，金沢の名前の由来の「漢字」を表した画像 1 点も用いた．「英訳した歴史文献」として，金沢の象嵌職人が明治から昭和にかけて書いた日記の一部を英訳し使用した．

歴史観光ガイドシステムを用いたツアー

2010 年 10 月 29 日に石川県金沢市の金沢城周辺において，外国人を対象としたツアーを実施した．参加者には，開発したシステムのアプリがインストールされた iPhone を貸し出し，ツアー中に使用してもらった．参加者にシステムの操作方法をあらかじめ説明し，その後，2 時間のツアーを行った．システムに登録されている 14 カ所のスポットのうち，移動時間が短い 10 カ所を巡った．ツアー後，アンケート調査を実施した．さらにその後，自由参加のグループインタビューを実施した．ツアーの様子を図 -7 に示す．アンケート調査およびグループインタビューでの意見をもとに，コンテンツの追加とシステムの改良を行い，現在，iPhone アプリとして配信している [5]．

まとめ

日本は歴史豊かな国と諸外国から認知され，その重要な根拠となる古文書などの歴史資料は，戦災や自然災害の影響があるものの，全国各地に数多く現存している．それらは社会全体で共有するべき貴重な情報資源であることは疑いのない事実であるが，その収集・整理・保存に関する状況は，多くの場合良好であるとは言いがたく，2011 年 3 月に発生した東日本大震災の際には，多数の貴重な人命とともに多くの歴史資料も破損・消失した．

このような歴史資料が置かれている過酷な現状に対して，歴史資料を新しい観点から歴史観光分野やディジタルコンテンツ分野で活用し，現代社会における実践的な役割を再定義することで，歴史資料の新たな社会的価値が創出されることを遍プロジェクトは期待している．そのためには，たとえば，どの地域に，どのような歴史資料（年代・特徴・状態など）がどれだけ存在し，それらを活用した事業可能性がどの程度あるか？　など，社会的な活用を想定したより実践的な調査・研究を，これまでの伝統的な歴史研究とは異なった視点・アプローチで実施する必要があることを痛感している．

遍プロジェクトの活動では，多様な学術分野や立場の研究者・事業者が参加したことにより，学術ベンチャー企業の設立など多くの成果を生み出している．今後もこのような分野・組織横断的なコミュニティが有する可能性を，学術資源に関するさまざまな取り組みを通して明らかにしていきたい．

参考文献

1）遍プロジェクト，http://amane-project.jp/
2）平成 21 年度観光白書，国土交通省（2009）．
3）若林喜三郎：梅田日記―幕末金沢町民生活風物誌，北國出版（1970）．
4）遍プロジェクト：梅田日記―ある庶民がみた幕末金沢，能登印刷出版部（2009）．
5）Discover Kanazawa's History, http://itunes.apple.com/jp/app/discover-kanazawas-history/id435037517, AMANE+IP（2011）．

（2012 年 7 月 31 日受付）

▶ **堀井 洋（正会員）**　a-horii@amane-project.jp
2002 年北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了．2009 年合同会社 AMANE を設立，同代表社員．現在，学術資源リポジトリの開発・普及に関する研究活動に従事．博士（情報科学）．

▶ **沢田 史子**　sawa@po.incl.ne.jp
2005 年北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科博士後期課程修了．2010 年より北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科研究員．博士（知識科学）．観光情報学会，電気学会など各会員．

▶ **林 正治（正会員）**　masaharu.hayashi@r.hit-u.ac.jp
2004 年北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科博士前期課程修了．2009 年同研究科博士後期課程修了．現在，一橋大学情報化統括本部情報基盤センター助教．博士（知識科学）．